

日本語連用形名詞の自立性の段階について

沈 晨 (北京外国語大学北京日本学研究センター) †

On the Levels of the Independence of Japanese Infinitive-derived

Nouns

SHEN CHEN (Beijing Foreign Studies University)

1. はじめに

日本語には、動詞の名詞化にあたって、動詞の諸活用形中の一形である連用形が、そのままの形で名詞に転化するという、簡単な方式が古くから存続している(西尾 1961)。例えば、

(1) 動き、遊び、扱い、悩み、嗜み、受け入れ、立ち読み

などがある。本稿ではその過程を転成、または名詞化と呼ぶ。それら動詞連用形から形成されたと考えられる名詞を「連用形名詞」¹と呼ぶことにする。

ただし、上述の転成方法はすべての動詞に適用するのではなく、例えば、「打つ」には「打ち」、「隠れる」には「隠れ」といった名詞はあまり見当たらない。動詞のうち、30%-40%しか名詞化しないとされる(西尾 1961、金 2003)。転成困難な語の中で、一部は前に内項(internal argument)を添加すると名詞化できるようになる²。どんな語が名詞化するか、どんな語が名詞化しないのか。また、どんなものが内項を付加することによって名詞化できるのか。名詞として継承されにくい動詞の意味特徴が存在するのか、といった問題が問われる。

また、連用形名詞が使用される際、普通名詞とは異なる独特な様相を呈している。加藤(1987)では、連用形名詞が「ガ格、ヲ格にたちにくい。むしろ「～だ」「～の N」「～に／で…する。」の「～」に現れることが多い」ことを指摘している。また、主格に立つ場合、後続「は」よりも後続「が」のほうが望ましい点が指摘された(西尾 1961)³。そして、主語、述語などの位置に立つ場合も、制約が多く、学習者の習得が難しい一面がうかがえる。例えば、

(2) 昨日の(*働き/ ○仕事)は(*疲れでした/ ○疲れた)。(玉村 1970)

(3) それは体の疲れです。

(4)a. (*走り/ ○ランニング)は体に良い。

b. 走ることは体に良い。

c. 彼は走りが速い。(影山 2011 : 51)

(4)b と(4)c が適格な文であるのに対して、(4)a の「走り」が単独で主題にたつ場合は非文となる。つまり、「走る」の名詞形「走り」は「彼」という人間の属性の一面を描写するこ

† shenxinchen@gmail.com

¹ この類の名詞について、山田(1936)で 23 例挙げたうえ、副語尾の付属されるものの連用形を以て名詞に転成することも少なくないと述べ、「居体言」と名付けた。ほかに、「転成名詞」と呼ぶ人もいる。

² 例えば、「値打ち」「本立て」などである。

³ 例えば、「腐りが早い」「物覚えがよい」などである。

とが可能であるが、運動の一項目そのものを指示する働きを有していないようである。となると、動作・事態そのものがプロファイルされる場合でも、名詞化を経て、連用形名詞と「動詞+こと」は意味的に同じものではない。それはまた何を意味するものなのか、といった問題が興味深いである。

故に、本稿では、コーパスを利用して、連用形名詞の使用実態を調査し、その自立性により、自立できる語、文脈のサポートを必要とする語、複合語形式での名詞化を必要とする語という三段階に分け、連用形名詞の意味・構文的特徴を検討してみる。そして、動詞の意味とも関連付けて名詞化という過程を考えてみることにする。

2. 調査対象、方法と手順

2.1 調査対象

研究対象「連用形名詞」の規定について、本稿では基本的に西尾(1961)の立場に従う。つまり、「動詞連用形の種々な用法の中で、「(試験を)受けに行く(来る)・受けは(も・さえ等)する(しない)・お受けになる」などの〈受け〉のような用法は、連用修飾語をとることができ、多くの動詞に普遍的にみられる」用法であり、連用形名詞とは考えない。「しかし、「彼は(友人間の)受けがよい」の〈受け〉のような場合には、すでに連体修飾をとり得るから、名詞に転じたものとして、連用形名詞の範囲に含まれる。」また、通時的なものを入れると紛らわしいので、「霧」「境」「相撲」「歌舞伎」などのような語源的なものを考慮せずに、「現代日本の共通語で用いられる名詞のうち、動詞連用形から成り立ち、あるいは動詞連用形を含むもので、しかも普通の言語意識において、特別の知識なしに、多少の反省意識が働けばその語構造を把握しうるもの」という規定に従う。

なお、本稿では単純和語動詞⁴に絞り、どんな動詞の連用形が名詞として成り立つか、また、成り立つとすれば、どういうふうに使われているのか、いわゆる自立性ということに注目しながら検討する。

2.2 調査方法と手順

本稿では、動詞の連用形が名詞として使用されるときの実態を知るために、コーパスを使用して調査することにする。

調査用コーパスは国立国語研究所の KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」2008年データ版を利用する。当該コーパスは書籍・白書・Yahoo!知恵袋及び国会会議録を収録した約4490万語規模のコーパスであり、現代日本語の実態を反映できると思われる、本稿には適切だと思われる。

調査手順として、まず形態素解析システム MeCab⁵ でコーパスデータに対し形態素解析をし、解析後、品詞情報が標記される。そこで、名詞である語を収集する。次に、それらの名詞語彙を同解析システムの辞書 UniDic⁶ に登録されている動詞連用形と対照し、一致

⁴ ゆえに、「出会い」など(複合動詞「出会う」から転成されたと思われる名詞群)についての分析はまたの機会に譲る。ただし、「立ち読み」のような複合動詞形のない語は、「立ち」+「読み」から複合されたと考え、後項の「読み」が本稿の言う連用形名詞の検討範囲に入る。

⁵ MeCab は京都大学情報学研究科-日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所共同研究ユニットプロジェクトを通じて開発されたオープンソース形態素解析エンジンである。詳しくは <http://mecab.sourceforge.net/> を参照されたい。

⁶ UniDic は日本語テキストを単語に分割し、形態論情報を付与するための電子化辞書である。形態素解析器「茶釜(ChaSen)」、「和布蕪(MeCab)」の辞書として利用できる。詳しくは <http://www.tokuteicorpus.jp/dist/>

したものを抽出する。つまり、
 条件①品詞情報：名詞であること
 条件②語彙形式：動詞連用形であること
 という二つの条件を満たしたものを、調査材料として抽出した。

3. 連用形名詞の自立性の段階

3.1 三段階

連用形名詞のうち、「ガ格」、「ヲ格」などの格に立ち、普通名詞と同じように機能する語、いわゆる最も自立性の高い類から、構文上なんらかの構文パターンの助けを借りて成立する類や、語彙的に項や付加詞のサポートを必要とする、複合語でしか成立できない類など、多様性が見られる。また、そういった自立性の強弱の連続相から、元の動詞の意味とのかかわりが想像されうる。

コーパスより抽出された連用形名詞及び例文をもとに、手作業によって整理してみた。ここで連用形の名詞としての成立可否及び自立度により3分類してみた。

まず、基準A（動詞の連用形が単独で名詞として成立するか否か）により、「遊び」「付き」のような単独名詞形の持つものと、「(海岸) 沿い」「(ゴミ) 出し」「(びしょ) 濡れ」などのような複合名詞として使用するものに大別する。

そして、単独名詞形のあるものの中で、基準B（特定文脈のサポートが必要か否か）により、タイプ1「自立タイプ」と、タイプ2「構文補助タイプ」とに分ける。「遊び」「騒ぎ」などの語はタイプ1に属し、「お客様の受けがよい」「ボールの転がりがよい」などの語はタイプ2に入る。

上述のことを図で示すと、図1のようになる。

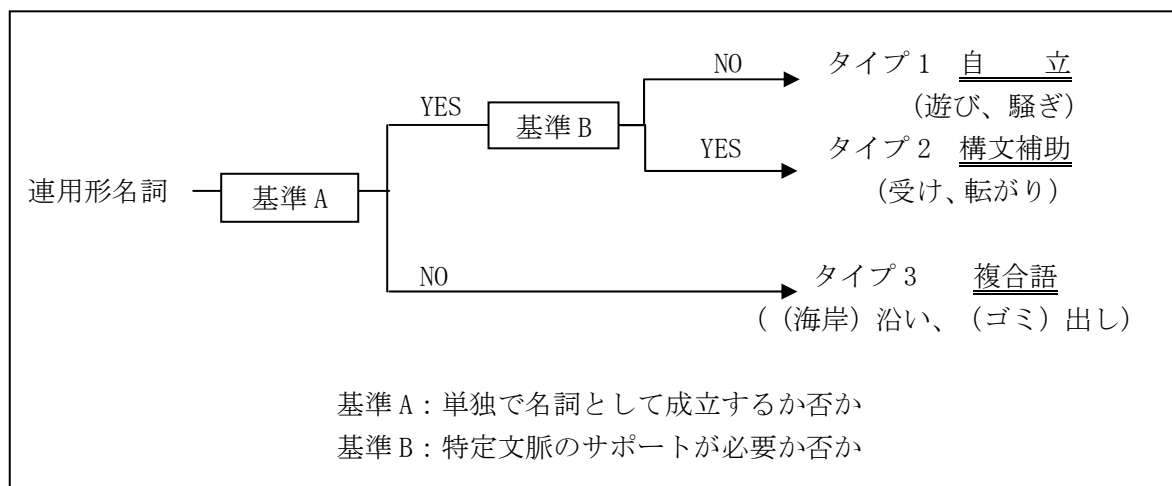


図1 自立性による動詞連用形名詞の分類

タイプ1は単独使用可能な語であり、タイプ2は特定文脈の助けを必要とするタイプである。タイプ3となると複合形式でしか使用できず、タイプ1からタイプ3へ、連用形自体が一語としての自立度がどんどん落ちていっているように思われる。動詞を自他動詞に

を参照されたい。

分け、タイプ別に語例を示してみると表1になる。

表1 連用形名詞自立性の全体像

	他動詞	自動詞	自立性
タイプ1 <u>自立</u>	扱い 祈り 戒め 占い 抑 え 飾り 考え 調べ 咎め 狙い 始め 守り 報い な ど (104語)	遊び 踊り 泳ぎ 帰り 重な り 答え 騒ぎ 戦い 疲れ 粘り 残り 笑い など (133語)	高 ↓ 低
タイプ2 <u>構文補助</u>	受け 下げ 作り 彫り 焼 き 磨き (29語)	当たり 乾き 転がり 進み 高まり 粘り 伸び 広がり 増え 降り 深まり 減り (50語)	
タイプ3 <u>複合語</u>	(資金)集め (糸)編み (答)打ち (メイク)落とし (結納)返し (証拠)固め (値)決め (ゴミ)出し (ろ うそく)立て (値)付け (ラ イバル)潰し (子供)連れ (井戸)掘り (家庭)持ち (段階)分け など (81語)	(週・梅雨)明け (ホテル) 宛て (梅雨)入り (雲)隠 れ (八時)過ぎ (使用)済 み (海岸)沿い (責任)逃 れ (人間)離れ (ため息) 混じり (京都)寄り など (50語)	

3.2 自立タイプ

まず、連用形名詞のうち、「ガ格」「二格」「ヲ格」「デ格」など、様々な格にたつことができ、機能的に普通名詞と似ている類がある。例えば、

(5) a. 自動詞

焦り 怒り 痛み 恐れ 驚き 渴き 苦しみ 痺れ 疲れ 慰み 悩み 匂い
励み 誇り 迷い 喜び 遊び 甘え 怠り 飢え 動き 頷き 踊り 泳ぎ 香
り 輝き 通い きらめき 暮らし 叫び 囁き 騒ぎ 戦い 泊まり 流れ 嘆
き 鳴り 眠り 登り 働き 響き 瞬き 休み 揺れ 酔い 詫び 空き 集ま
り 行き 帰り 重なり 固まり 勝ち 曇り 焦げ 染み ずれ つながり 並
び 濁り 禿げ 外れ 晴れ 負け 乱れ 戻り 破れ 歪み 汚れ など

b. 他動詞

商い 味わい 扱い 誤り 争い いじめ 偽り 営み 祈り 戒め 彩り 祝い
疑い 写し 訴え 占い 恨み 売り 奢り 教え 脅し 買い 囲い 囲み 賭

け 飾り 語り 悲しみ 借り 狩り 考え 悔い 企て 試み 断り 探り 支え 誘い 定め 悟り 裁き 妨げ 忍び 知らせ 調べ 救い 勧め 責め 攻め 競り 備え 蓄え 貯え 助け 楽しみ 頼み 試し 伝え 慎み 包み 綴り 務め 勤め 繋ぎ 釣り 問い 咎め 届け 流し 眺め 慰め 習い 習わし 盗み 願い 狙い 覗き 望み 呪い 始め 含み 祭り まとめ 学び 招き 守り 迎え 報い 恵み 儲け 求め 許し 装い 読み など

(5)の語例を観察すれば分かるように、「恨む」「祈る」「疑う」「悲しむ」などの心理・感情を表すものや、「問う」「語る」「知らせる」「訴える」「調べる」「眺める」など、人間の認識活動・言語活動・表現活動を表すものの連用形が多く見られた。

ただし、動詞からの転成であるゆえ、動詞の意味が受け継がれ、後続する動詞・形容詞などに一定の偏りを示している点では特徴的である。そのうちで、高頻度の「動き」を取り上げてみる。次の表は「動き」のコロケーションパターンである。

表2 「動きを/が/に」のコロケーションパターン

	コロケーションパターン(用例数)	用例数
～を	見る(271)、する(266)、止める・とめる(207)、示す(125)、見せる・みせる(116)、追う(39)、封じる(33)、知る(29)、観察する(23)、読む(21)…	2709
～が	ある(270)、見られる(169)、出る(120)、止まる(69)、鈍い(59)、強まる(56)、取れる(43)、速い・早い(43)、できる(41)、悪い(39)、激しい(36)、見える(35)、始まる(30)、ない(26)、広がる(26)、良い(26)、分かる(25)、続く(24)、起こる(23)、高まる(21)、遅い(21)…	2199
～に	あわせる(75)、なる(57)、対応する(28)、注目する(20)、注意する(10)、呼応する(10)、反応する(10)…	744

表2を通して、以下の事実が確認できる。

(一)「が」格に立つ場合、述語の部分として、「ある」「見られる」「出る」「止まる」「できる」「鈍い」「速い・早い」「ない」などが多く現れる。いわゆる存在詞述語文、存在・必要・充足の動詞述語文、非存在・存在量の形容詞述語文が多い。そして、名詞述語文はほとんどない。

動詞は本来動作・属性を表わすものである。「動き」などの動詞が名詞化されてできた連用形名詞は、動詞の意味素性を受け継いでいる。故に、連用形名詞を主格・主題に据え、認識の中核として認識する際、具体的な「もの」としてではなく、動作・属性の抽象化されたものとしてとらえているのである。それ故、その動作・属性のあり方として、後ろの述語に存在・必要・充足・程度などを表わす語が多くくるだろう。

(二)「ヲ格」では、「する」「止める」「示す」「見せる」など、機能動詞といわれるものが現れる。また、ほかに、「見る」「追う」「知る」「観察する」「読む」ほとんど人間の認識活動を表す動詞がある。

3.3 構文補助タイプ

このタイプはさらにいくつかの種類に分けられる。

A 「主体+の～」構文が必要なもの

- B 「(は/の)～が…」 「様態～」 構文が必要なもの
 C イディオム

A 「主体+の～」 構文が必要なもの

動詞には、対象物の存否を問わず、主体が必ず関わるわけなので、名詞化された後、「主体+の+V 連用形」という形式も一般的に存在するかのようと思われる。

ただし、肝心なところは、その「主体+の」の部分を取れば、文として成立可能かどうかである。例えば、

- (6)a. さらにそれは国内の反戦運動の高まりと、経済の弱体化を招く結果となった。
 (『わかりやすいベトナム戦争』)

b. ×さらにそれは国内の高まりと、経済の弱体化を招く結果となった。

- (7)a. この訓示が出ると、現役軍隊の騒ぎはぴったり治まった。
 (『「文芸春秋」にみる昭和史』)

b. ○この訓示が出ると、騒ぎはぴったり治まった。

上述の(6)と(7)から分かるように、文を組み立てるとき、「高まり」は必ず「主体+の」の提示を必要とし、「主体+の」を削除すると、文としては成立しがたい。それに対して、「騒ぎ」は「主体+の」提示がなくても、文として成立できる⁷。

そのような語はさらに、「崩れ、高まり、伸び、広がり、増え、深まり、減り、下げ」などがある。

B 「(は/の)～が…」 「様態～」 構文が必要なもの

連用形名詞のうち、(3)のような「動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」の意味を表すものが多いと指摘されている。

- (8)金使い(が荒い)・滑り(がいい)・売れ行き(がすごい)・出来(米の一)・当たり(が柔らかい)
 (西尾 1961)

コーパスを調べると、次のようなものが見られる。

(9)a. 自動詞

当たりが強い、お客様の受けがよい、テレビの映りが悪い、写真の写りが悪い、収まりが良い、エンジンの掛かりが遅い、ナイロンのシャツは乾きが速い、この薬は効きが速い、聞こえがいい、包丁がなまって切れが悪い、腐りが早い、ボールの転がりがよい、触りが柔らかい、窓の締まりが悪い、工事の進みが速い、ふすまの滑りを良くする、すわりが悪い、色の染まりが悪い、客の付きが悪い、脳内神経の伝わりが良くなる、今年は米の出来がいい、水の出がいい、声の通りがいい、傷の治りが遅い、粘りがある、化粧ののりが悪い、話の運びがうまい、ボールの弾みが悪い、張りのある声、窓の開きが悪い、頭の回りが早い、血の巡りが悪い、たき火の燃えが悪い、バッテリーの持ちがよい、彼は分かりが速い

b. 他動詞

削りが粗い、刷りが美しい、彫りが深い、焼きが悪い/甘い、巻きが強い、作りがよい、織りが粗い、大きい生地の中の縫いが簡単、縫りの甘い糸、あの食堂は盛りがいい

⁷ 関連する概念として、西山(1990)では「非飽和名詞」、影山(2011: 225-231)では「相対名詞」という概念を提起し述べている。

バットの振りが鈍い、体のこなしが柔らかい
押しが強い、魚の引きが強い、魚の食いが悪い
覚えが早い

(9)の例は「ガ構文」のサポートの下で名詞として成立できる。その類は、構文上、自立タイプの使い方と違う。例えば、

- (10)○a. 言葉の遊びをする
 ×b. 包丁がこんな切れをする。
 ○c. そのような騒ぎがあった。
 ×d. そのような受けがあった。

「遊び」、「騒ぎ」が「をする」・「がある」などの構文にたてるのに対し、「切れ」「受け」などは、「ヲ格」、「ガ格+動詞」など、自由に文の各位置にたつことは難しく、「…ノ(ハ)～ガ+形容詞(形容動詞)」という特定の構文パターンで使われることが多い。前の「…ノ(ハ)」の部分は動作の行われる主体であり、後ろに来るものとして、「良い」「悪い」「速い」「遅い」「著しい」などの形容詞が多い。

また、「回」など、デキゴトの助数詞も使えない。

- (11) ? シャツの一回の乾き

つまり、この類の連用形名詞は一つの事件・デキゴト・動作を表しているのではなく、動作の一側面、状態・様態・様子を描いているわけである。

ただし、自立の名詞でもこの用法が可能である。例えば、

- (12)a 手は動きを止めていた。
 b. 考えると却って動きが鈍くなる。

(12)a は自立の名詞用法であるが、bの方は「ガ構文」を用いて、動詞のあり方・様態を描写している。

C イディオム

- (13)押さえがきかない、潰しが効く、泣きを入れる、逃げも隠れもしない、磨きをかける

3.4 内項・付加詞複合語タイプ

構文上の補足が無理で、必ず複合語形式で名詞化を要求する語がある。例えば、

- (14)a. (値) 上がり (ホテル) 宛て (梅雨) 入り (色) 移り (雲) 隠れ (冬) 枯れ (税) 込み (値) 下がり (八重) 咲き (湯) 冷め (戸) 閉まり (八時) 過ぎ (使用) 済み (計画) 倒れ (高) 止まり (責任) 逃れ (親) 離れ (ため息) 混じり (雨) 漏り (日) 焼け (小) 止み (「オッサン」) 呼ばわり (長) 生き (早) 起き (立ち) 消え (行き) 来 (置き) 去り (若) 死に (大) 助かり (逆) 立ち (丸) 潰れ (生) 煮え (びしょ) 濡れ (昼) 寝 (中年) 太り (まる) 見え (夏) 痩せ など
- b. (旗) 上げ (さつま) 揚げ (資金) 集め (糸) 編み (数字) 合わせ (名刺) 入れ (田) 植え (様子) 伺い (口) 移し (穴) 埋め (火) 起こし (メイク) 落とし (荷) 降ろし (雪) 下ろし (水) 換え (席) 替え (真相) 隠し (新聞) 掛け (証拠) 固め (芝) 刈り (値) 決め (ブロック) 崩し (臭い) 消し (頭) 越し (湯) 冷まし (コマ) ずらし (髪) 染め (ゴミ) 出し (ろうそく) 立て (2階) 建て (根) 絶やし (値) 付け (塩) 漬け (通行) 止め (カビ) 取り (自分) 撮り (裾) 直し (五目) 並べ

(味噌) 煮 (皮) 剥ぎ (日本) 外し (井戸) 掘り (ごちゃ) 混ぜ (茶碗)
蒸し (ルール) 破り など

例(14)から分かるように、「入れる」「埋める」「換える」「崩す」「取る」など、対象物に具体的な動作を与え、対象物に位置・形態の変化をもたらしたものが多い。それが自立タイプの語と良い対照をなす。

上述のことをまとめて、連用形名詞は自立度に沿って連続相をなしていることが分かる。具体的には次の図のようになる。

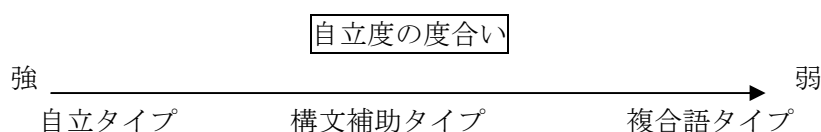


図2 連用形名詞自立度の連続相

4. 終わりに

本稿では、日本語単純和語動詞の連用形名詞を研究対象とし、従来あまり注目していなかった自立度の問題に焦点をあて、連用形名詞を自立タイプ、構文補助タイプ、複合語タイプに分け、それぞれの類の特徴を観察してみた。

名詞化には「実体化」という働きを持つとされる(池上1978)。動詞から名詞への転成において、音節といった要因のほかに、元の動詞の意味自体が制約を加えることが予想される。動詞の典型的要素、いわゆる他動性の構成要素、動作性・瞬時性・影響性などが名詞化過程で影響を与えていると思われるが、その影響の優先順位はどうなっているかなどの問題について課題としておく。

文 献

Paul J. Hopper and Sandra A. Thompson(1980)Transitivity in Grammar and Discourse. *Language*Vol. 56, No. 2.

池上嘉彦(1978)『意味の世界—現代言語学から視る—』日本放送出版協会

岡村正章(1995)「「典型的な動詞連用形名詞」に関する一考察」上智大学国文学論集 28

影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版

金美淑(2003)「連用形名詞」『日本語論究 7』、pp.299-320、和泉書院

金美淑(2007)「日本語の連用形名詞」名古屋大学大学院文学研究科博士論文

西尾寅弥(1961)「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』43